
神の子

香取幸助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の子

【Nコード】

N7517F

【作者名】

香取幸助

【あらすじ】

数年前から発生している“人の仕業”と思えぬ連続殺人事件。その現場に残された犯人のものと思われるDNAには驚きの事実が隠されていた。事件に深くかわる新興宗教を追う私立探偵、皇礼次郎が遭遇する驚愕の事実と異様な宗教の全容。晒し中！！

序章：発端

主はパンを取り、賛美の祈りを唱えられ、それを割いて弟子達に与えて

「食べなさい、これはわたしの体である」

又杯を取り、彼らに渡して

「これは、罪が赦されるように、多くの人のために流すわたしの契約の血である」

と仰せられ、パンとぶどう酒をお与えになりました。

くマタイによる福音書

青年は清^{すがすが}しい気持ちであつた。

一糸^{まと}纏わぬ姿である。

青年は筆や刷毛を使わない。赤い塗料を両手にたっぷり付けて壁に

赤い塗料をすいすい塗ってゆく。青年は赤い色が好きだ。

今日の赤はひときわ鮮やかだ。きつと質の良い塗料なのだろう。

ベートーヴェンの第9が大音量で流れている。これも青年の好きな音楽だ。特に壁に赤色を塗る時はいつも聞いている。好きな音楽を聴きながら好きな赤色を塗る。わくわくするほど楽しい。

ようやく壁の一つを塗り終わった。

（やはり今日の赤はとてもきれいだ。質がよいんだね。）

（でも塗らなきゃいけない壁は3つも残っている。まだまだこれからだ。）

手に持った赤い“りんご”をひとくちかじりながら、赤く塗り終えた壁を眺める。“りんご”からは赤い果汁がぼたぼた床に零れ落ちる。所々が凝固し始めて、赤黒く変色しているが、今日はいつもより厚めに塗ったせいだろう、ぬらぬらとした輝きはいつもより美しい。

時計を見るとまだ夜中の2時だ。夜は長い。朝までには全部好きな赤に塗れるだろう。青年は（さあ、やるぞ）という感じで、手に持った“りんご”の残りを一気に口に含んだ。頬を大きくふくらませて（しゃくしゃく）と咀嚼しながら、これから塗る壁を眺めていたが、思い立ったように“それ”の中に両手をつまみ手に赤い塗料をたっぷりと塗りつけた。

“それ”はりんごと同じ赤い色をしていた。（なぜならりんごは元々“それ”の一部であったのだから・・）時々、“ぴくっ・ぴくっ”と痙攣のような動きをした。ちょうど真ん中あたりにぽっかりと大きな穴が開いており、青年はそこに手をつ込んで塗料を手につけていた。大きな穴に手をつ込むと、“それ”の上の方の小さな穴が閉じたり開いたりしながら“ぎいっ”とか“ごぎぎ”っていう変な音を出した。そして痙攣みたいな動きがいつそう大きくなる。

（まだ生きているんだね）

ベートーヴェンの第9が大音量で流れる一室。

青年は新しい壁にとりかかった。

朝の11時30分を過ぎていた。

渋谷円山町のホテル「シャレード」のベテラン従業員、塚田みち子は軽く舌打ちをして電話を取り、部屋番号のボタンを押した。呼び出し音は鳴っているが一向に取る様子がない。さつきと同じだ。

（いやねえ）

電話を切ると、リネン室の内線ボタンを押した。若い男の声で答える。

「あ、中野君、悪いわねえ。ちょっと401号室のお客んですけどさあ、見に行つてほしいのよ。ほら、もうチェックアウト時間過ぎてるし……」

そう言つて小声で続ける

「……最近、物騒な事件も多いし……」

それを聞いて中野はぞつとした。

「いやだなあ、もう……。やめてくださいよ。俺まだここでのバイト2週間ですよ。もう……。気味悪いなあ」

「あはは、ごめんごめん、冗談だわよ。たぶん昨日激しすぎて熟睡

しちゃってるんだと思うけど、良くあるのよ。まあ、これも経験だ
と思って・・・ね。」

「ふぁゝい・・・。わっかりましたぁゝ」

中野はふてくされた様な声で答えて電話を切った。自分の息子く
らいの若者のそんな声に、塚田は思わず吹いてしまった。

（ああゝ面倒くせえゝなあゝ）

最初の内はラブホテルのバイトなんて興味深々だった。ひよつと
したらスケベなオーナーが部屋に隠しカメラを付けていて、隠し部
屋みたいな所には全室の中を写したモニターがズラツとあって・・・
。なんて妄想していたが、とんでもない・・・。

中野の主な仕事は客室の清掃、いろんな体液で汚れたベッドのシ
ーツを交換したり、排水溝に体毛がいっぱい詰まった風呂場をきれ
いにしたり、精液でべとべとになったティッシュがいっぱい詰まっ
たゴミ箱をきれいにしたりする。特に客が帰った直後のあの独特の
部屋のニオイは強烈であった。バイトをはじめたばかりの頃は何度
も戻しそうになった。

401号室は4階の一番奥の部屋だ。部屋の前に立ってチャイム
を鳴らす。応答がない。再度鳴らしてみても応答がやはり無い。中
野はマスターキーを取り出し鍵穴に差し込んだ。

「失礼します・・・」

ドアから遠慮気味に顔だけ覗かせる。と、同時に強烈なニオイが中
野の鼻腔を襲った。

思わずドアを閉めて廊下に戻った。強烈なニオイだ。今まで色ん
なニオイを嗅いできたがここまでののは初めてだ。生臭さと、何かが
錆びた様な臭いと、色んなものが混ざった様な・・・。それはいま
で嗅いできたどのニオイとも似ていなかった。

中野は思い切り深呼吸をして再度ドアを開けた。

部屋の中は真っ暗であつた。クラシック音楽が大音量で流れている。年末によく聞くヤツだ。確かベートーベン・・・？

中野はすさまじい二オイに“えずき”ながらライトのスイッチをつけた。

「ひゃっ！！！！！」

部屋は真っ赤であつた。

（確かこの部屋の壁はベージュだつたはずじゃ・・・）

壁に目を近づける。むっとする二オイがより強烈になる。その赤は血であつた。血が四方の壁一面にびっしりと塗られているのだ。血液に含まれる脂肪分がライトを受けてぬらぬらと輝いている。部屋中が血で真っ赤に彩られている。

息がどんどん荒くなっている。実はさっきから気が付いていた。

さっきから目の端の方で捕らえていた。

部屋の真ん中のベットの上。

中野は今にも吐きそうに空えずきをしながら、ゆっくりと視線を移す。

“それ”が視線の真ん中に入った途端、中野は茶色い吐寫物としゃぶつを床に落とした。

“それ”は真っ赤であつた。

まるでカエルの解剖のように腹部を大きく裂かれ広げられ、内臓が露出している。その所々がまるで独立した生き物の様に、びくつびくつと小さく痙攣している。

“それ”は間違いなく人間の死体であつた。

「・・・・・・・・！！！！！」

中野は転げだすように部屋から飛び出した。

第1章1話：悪夢

薄汚れた黄色い歯を見せて笑う男の顔・・・。

おびえた青年の目・・・。。。

「待て!!」

叫ぶ声・
・
・
・
・
。

銃声！！

飛び散る血！！

崩れ落ちる若い男の顔。

俺の目・・・・・・・・。

「待て・・・・・・・・!!」

追いかける

「待て・・・・・・・・!!」

逃げる男の後姿・・・・・・・・。

「待て!!!!」

横たわる青年

病院の処置室

立ち尽くす人影がうつ．．．。

泣き声

嗚咽．．．。

目の前で音を立てて閉まる扉・・。

地響きの様な扉の音・・。。

徐々に景色が暗くなり、やがて視界全体が闇に包まれる・・・・・

・
・
・
・
・

「待て!!」

叫ぶと同時に目が覚めた。

体中に脂汗が噴き出している。

（また、いつもの夢だ。）

警察を退職して10年、いまだ同じ夢を見る。

体中にまとわりつくような脂汗と共に目覚めるのが当たり前的事になってしまった。

カーテンの隙間から日差しがもれる・・・。

俺はこの悪夢と一生付き合っていく・・・

それが俺の運命だ・・・。

第1章2話：依頼

肩に届きそうな長髪に無精ひげ。ベージュのコットンスーツに、インナーの白シャツは第2ボタンまで開けるのがルール。

あるヤマ（事件）がきっかけで、人の生き死にに関わるのがほとんど嫌になり、警視庁捜査1課の刑事を辞職したのが10年前。毎日、地味なスーツを着ていた反動か、今やこんな軟派な出で立ちだ。そのコットンスーツの上着を肩に掛けて薄暗い階段を上る。

平成10年に建てられたこのビルは、いわゆる“わけアリ物件”だ。過去にコロシ（殺人事件）が発生し、その手口の残虐さから派手に報道された。そのコロシの舞台がこのビルっていうわけだ。

そんな訳で入居者はことごとく退去、横浜の繁華街のはずれという中途半端な立地も幸い（？）してビルの買い手もつかず、周りから「幽霊ビル」なんて言われる始末。当然家賃はただ同然の格安。俺みたいな無名の私立探偵の事務所兼自宅にはびったりだ。

一つ悩みは、依頼者を事務所に呼べないって事だ。それでも最近はずネット経由の依頼がほとんどで、依頼者と一度も顔を合わせないなんて事はざら。どうしてもって場合は、近くの喫茶店で、というパターンなので実の所ほとんど商売への影響は無い。

「皇礼次郎探偵事務所」
すめいれい

昔から名前負けする、とよく言われる。勿論、本名だ。俳優みたいな名前だ。気恥ずかしくて本気で改名しようかと何度か思った。

事務所を開くときも、ありふれた名前にしようかと思ったが、何と言ってもインパクト勝負でやっぱりこの名前を使うことにした。

いまだきエレベーターもない、この“幽霊ビル”の最上階（とはいつても3階だが）が俺の事務所兼住居だ。3階部分には一応2つの事務所が入居できるスペースがあるのだが、こんなビルなので入

居者もおらず、勝手に2部屋使わせてもらってる。一つは事務所、一つは俺の住居スペース、だ。

事務所の方の扉を開けて、ライトをつける。と、同時に何か黒いものがさつと動いた。

（またか・・・）

本当にここに住むようになってから、ユーレイとか摩訶不思議なモノがこの世に存在するって事を信じるようになった。風呂場で髪の毛を洗っている時、ふと顔を上げて鏡を見たら、自分の肩越しに青白い顔の男が写ってた、なんてしょっちゅうだ。最初のうちは毎回、腰抜かしていたが、もう慣れてしまった・・・、いや、それは嘘、相変わらず怖い、以前より耐性がついた・・・。

自称霊感師の近所のおばちゃん曰く、ここには例の殺人事件をきっかけに、色んなユーレイたちが集まってきてるそうだ。たぶん、俺は日本一度胸のある探偵だろう。（笑）

リサイクル店で格安で購入した事務机と椅子に腰掛け、x電気の新タイプの特売品で、並んで買ったノート型パソコンの電源を入れた。旧タイプの立ち上がりの遅さに毎回イラッとしながら、メールボックスを開く。相変わらず迷惑メールが多い。この瞬間、いつもエロサイト見るのもうやめよう、と思う。

（お・・・！来てる・・・！）

仕事の依頼だ。1、2・・・、2件・・・か。1件目は・・・、いつもの浮気調査だ。こういうのは冷やかしの場合も多いので、かならず依頼者とはメールでのやり取りを2・3回繰り返す。

そして、ここからは俺の勘なのだが、本気だと思える相手だけ仕事に入る。勿論、前金だ。

2件目は・・・??

（お・・・？）

俺は、依頼者の名前に目を見開いた。

依頼者名：鳥栖弘とす・ひろし

俺が警視庁捜査一課殺人捜査第2係在職中の時。あるホシ（犯人）を追いつめた際に、誤射してしまった青年の父親だ。俺はこの人の息子を殺してしまった・・・同姓同名かと思つたが、やはり間違いない。

皇さま

ご無沙汰しております。突然の連絡ご容赦ください。

皇さまが警視庁を退官なさつて、ご自身で調査事務所を興していらっしゃる事を大賀さまからお聞きしました。

実は緊急でご相談、ご依頼申し上げたい件がございます。

お忙しい所、誠に申し訳ございませんが、是非一度、お会いするお時間をいただけませんか。この1・2週間の内でご都合の良い時間をお知らせください。

当方は自由の身に付き、皇さまのご都合に合わせます。ご返事お待ちしております。

大賀とは俺の警視庁捜査一課時の同僚だ。どういう事だ・・・？なぜ、今更俺に・・・？依頼・・・？俺に何か仕事を依頼するつもりなのか・・・？

初めて鳥栖弘と会ったのは、撃たれた青年が運ばれた病院の集中治療室前の待合室だった。小柄で痩せ型の“貧相”と言っても良い体つき、しかしながら太くて低い声と眼鏡の奥の意思を感じさせる目が印象的であった。

「このたびは大変申し訳ありません・・・。」

俺はただ頭を下げるしかなかった。母親が何か言おうとするのを制して

「いや、刑事さん。あなたは、ご自分の職務に忠実であっただけです・・・。」

そう言つて、俺に頭を下げた。横一文字に口を固く結び、ぶつけよ
うの無い怒りに耐えているのがわかった。
それから数時間後、治療室から出てきた医師から青年の死を告げ
られた。

「我々も最善を尽くしたのですが・・・残念です。」

母親の悲鳴のような叫びと、父親の嗚咽・・・・・・・・。

久しぶりに父親の名前を目にして、あの光景が再び蘇る。俺はこの事件をきっかけに“人の生き死に”に立ち会うのが本当に嫌にな

ってしまった。それは10年たった今も変わらない。いや、ますます強くなっている。

受ける依頼がもつぱら浮気調査と人探しなのも、出来るだけその二オイを避けている結果だ。

「お会いする時間をいただけませんか・・・か。」

椅子の背もたれに背を預ける。机の引き出しからタバコを取り出して、火力最大にした100円ライターで火をつける。

「ふう~~~~っつ」

やっぱり禁煙なんて無理だ。たばこはうまい。でも今回は1日もつた。新記録だ。

「.....」

鳥栖弘と、会うかどうか迷っている・・。

第1章3話：俺の決め方

夜10時 横浜 関内。

有名な伊勢崎町商店街の街、そして俺の好きなキャバクラの街。

伊勢崎町商店街を歩いていくつかある細い路地の内の一つを左に折れる。雑居ビルの入り口に茶髪を自分の顔くらいの大きさに“盛った”オネーチャン達の顔写真の看板。

「QUEEN」

そう、ここが行きつけの店。女の子のドリンク代、指名料込みで2時間座って2万円くらい、まあこんなもんだろうが、売れない探偵には贅沢な話だ。

「いらつしゃいませ。いつもありがとうございます。」

店の入り口で若いマネージャーが丁寧に頭を下げる。

「ベージュを基調にした落ち着いたインテリア。柔らかな照明。『

売り』はキャバクラ料金で銀座の雰囲気。まあ言うのは自由だ。

席に案内されて、いつものオネーチャンを指名だ。

「かしこまりました。」

にやりと笑うマネージャーの金歯がキラリ。

お絞りで手を拭きながら、周りを気にしつつ顔も拭く。客の入りは7割。この時間にしては少し寂しい。

「いらつしゃいませ。」

そういいながら彼女が、俺の左隣に座る。

「皇さん、いつもありがとう」

「レイちゃん、また来ちゃったよ!!」

「ふふ・・うれしい・・」

「水割りはいつもの濃さでいい?」

「ああ・・。レイちゃんも飲みなよ」

そんなやり取りをしながら水割りを作る女を眺める。

体のラインに沿った薄いスカイブルーのキャミソールドレスが柔

らかなライトに映える。華奢な体。白く柔らかそうな肌。深い谷間を作っている豊かな胸とは対照的な細く尖った肩と腰。細く長い首の上には小さなアゴの小ぶりな顔が乗っている。つんと尖った鼻に長い睫毛に縁取られた、大きく、ややつり上がった黒目の大きな瞳・。今時のキャバ嬢には珍しく、黒髪をゆるくアップにしたヘアースタイル。母方が鹿児島出身だと言っていたが、見事にそのDNAを引き継いでいる彫りの深い顔立ち。

とにかく見た目は100%俺の好みだ。初めてこの店に来たとき、彼女を見ていきなり店内指名したくらいだ。めったにある事じゃないそうで、彼女も驚いたらしいが、それで俺の印象が彼女の中に強く残った(そうだ)。

その日から俺の関内通いが始まったわけだ。

「皇さん、相変わらず忙しいの・・・？」

「うん・・・まあまあだよ。働かないとココ、来れないからね。」

(これ嘘。最近ヒマだ・・・)

「ふふ・・・」

(か・・・可愛い~~~~!!)

彼女のこの笑顔に、商売と分かっていても癒される。

「x　　ゝ!」

たあいがない馬鹿話に盛り上がり、さあ、気分良くなってきたぞ、
って時に例の金齒を輝かせたマネージャーが音もなく俺の耳元でさ
さやく。

「お客様、申し訳ございません。そろそろお時間ですが、延長なさ
いますか？」

俺は決して延長しない。そうしないと、金が羽を生やしたように
一気に飛んでいく。

「いや、帰る」

会計をすませ、レイも見送りの為、出口まで一緒に来た。

「それじゃね。」

そう言つて背を向けると

「皇さん、大丈夫・・・？」

とレイが声を掛ける。

「え、何、どうしたの??」

「皇さん、何か寂しそう・・・」

小首を傾げて笑顔を見せる。そんな笑顔には俺も思いつきりの笑
顔で

「ま、生まれた時から天涯孤独の身だからね・・・でも、もう慣
れっこだよ・・・」

「そう・・・また来てね・・・」

「・・・うん。必ず・・・」

こういう感じで何か余韻めいたものを残すのは彼女達の営業テク
ニックなんだろう。でも、この時俺は本当に“また来よう”と思う
のだった。
（バカ）

レイに言つた事は嘘ではない。俺は生まれた時から孤独だ。

母親は離婚後俺を出産して死亡。父親は離婚後行方不明で、高校
を卒業するまで施設で過ごした。今まで好きになつた女は何人かい

たがなぜか長く続かない。

まあ確かに、この年になるまで家庭の温かさってモノを知らないのは少し寂しいか……。

そんな事を考えながら伊勢崎町を歩く。

（よし！決めた！鳥栖に会おう！！）

イロイロ煮詰まると、なぜかキャバクラに行きたくなる。そしてなぜかキャバクラ帰りに、こんな感じで何かを決心する。

こうして俺はこれからもキャバクラ通いを続けるのだろう。

あのマネージャーのキラリと光る金歯の一部は俺の飲み代で出来ている……。

第1章4話：神の子

関内のキャバクラ帰りに決断してから3日後、俺は銀座の喫茶店「ルノアール」で鳥栖弘氏と待ち合わせをしている。鳥栖氏の指定であつたが、ルノアールは好きな場所だ。客の平均年齢が高いのと、遠慮なく煙草を吸える所がいい。

テーブル席もあるのだが、俺はいつもここの特徴である低いソファの方に腰掛ける。背もたれにもたれかかるといつも眠気を催すほど気持ちがいい。平日の今日も、営業途中のサラリーマンらしき客が何人かソファにもたれて目を閉じている。

警察を退職してから鳥栖氏と会うのは初めてだ。誤射してしまつた青年への墓参りはこの10年、一度も欠かした事はない。それでも被害者の家族に会うのが忍びなく、ずるずると時が経つてしまつた。まったく俺はどうしようもない奴だ。

ベージュのコットンスーツの上着の内ポケットからくしゃくしゃになつたマイルドセブンを取り出す。火力最大にした1000円ライターで火を付ける。約束の時間は2時。まだ30分ある。

背もたれに深く身を預ける。そのまま上を向いて煙草の煙を吐き出す。煙草が苦い……

灰皿に煙草を押し付け、目を閉じる……。

病院の処置室。

処置台に青年が横たわっている。母親が青年にすがりついて泣いている。

青年の名を呼ぶ声が室内に響く。肩を震わせ立ち尽くす父親・・・。

死亡の原因は銃創による出血性ショック死。俺の銃弾はこの20歳の青年の未来を奪ってしまった・・・。

体中から血の気が引き、立っているのがやっとだ。それでも俺は、ただ立っている事しかできなかった・・・。

「刑事さん、申し訳ないですが今日の所はお引取り下さい・・・・」
目を真っ赤にした父親がそういいながら処置室のドアを閉じる。

俺の目の前でドアが音を立てて閉まる。

「皇さん・・・皇さん・・・大丈夫ですか・・・？」

はつと、して目を開く。小柄な男性が俺の顔を覗き込んでいる。

「鳥栖です。お久しぶりです・・・」

俺はガバツつと立ち上がり、頭を下げる。

「どうもご無沙汰しています！！」

鳥栖氏を待つほんの短い時間の内に眠ってしまった。そしていつもの夢・・・。

鳥栖氏はとまどいの笑みを浮かべながら、俺の正面のソファに腰掛けた。

「少し早いかな、とも思ったのですが・・・よかった、皇さん来ていらして・・・」

鳥栖氏がソファに腰掛けた後に、俺もソファに座る。さっきまでとは逆に、浅く腰掛け背筋をのばす。

鳥栖氏は、にこやかな顔のまま

「本当にお久しぶりですね・・・」

そついいながら注文を取りにきたウェイトレスにホットコーヒーを注

文する。

「ご無沙汰しています・・・」

また頭を下げる・・・本当に今の俺には鳥栖氏の顔をまともに見ることができない。ただただ頭を下げることしかできない・・・。

「皇さん、頭を上げてください。あなたがそんな風では、私の方が話ができないじゃないですか・・・」

「・・・・・・・・」

そう言われて顔を上げ、鳥栖氏を見た。

短く切りそろえた頭髪はすっかり薄くなり、白くなっている。眼鏡の奥のまなざしもずいぶん柔らかさを増したようだ・・・。当時は高校の教師をしていたが、もう退職しているのだろう。白い半そでポロシャツとコットンパンツというラフな出で立ちだ。

それにしてもずいぶん小さくなった気がする。元々、小柄な人であつたが、痩せたのか・・・。

「おまたせしました。」

ウェイトレスが深々とお辞儀をしてコーヒーを運んできた。こんな今時珍しい馬鹿丁寧なサービスぶりもこの店の特徴だ。丁寧にホットコーヒーを鳥栖氏の前に置いて、

「失礼いたしました」

又、馬鹿丁寧にお辞儀をして席を離れる。

これが丁度いい間になった。なんとなく雰囲気が和らいだ。

「お元気でらっしゃいましたか」

「え・・・ええ・・・はい。貧乏なんとやらですが、何とか・・・。」

「

「そうですか。それは良かった。」

そついうと鳥栖氏はコーヒーにひとくち口を付ける。

「警察を退職以降、何のご挨拶もいたしませんで、本当に何と申せばよいのか・・・。」

鳥栖氏は大きく首を振りながら

「いやいや・・・皇さん、やめてください・・・。皇さんがこの10

年間、1回も欠かすこと無く一弥の命日に墓前にいらしていた事はわかっています……。本当にありがたく思っていますよ……。」

「本当にそれくらいしか今の私にできる事は……。」

鳥栖氏は笑顔を見せ、店の外の景色に目を移す。

「ああ……。そう言えば……。」

「そう言えば……。皇さん、ホームページはご自分で……?」

一瞬、何の事かと思っただが、俺の事務所のホームページの事とわかった。

「あ、ああ……。いえ。ちょっと知り合いに詳しいのがいまして……。」

これとアドセンス広告で、俺一人何とかやっていける位の仕事の依頼が来る。

「結構、格好よく映ってましたよ……。」

ホームページには俺の写真も掲載している。そうしないと信用性が高まらない。

「いや……。ありがとうございます。」

鳥栖氏は相変わらず、神経の細やかな人だ。本来、彼に憎悪されても当然の俺だ。こんな俺にも気を使ってくれる。こんな風に会話をはずませる為の気遣いに労をいとわない。

それでもメールで相談したい事がある、と言っていたのを切り出さないのは、何か理由でもあるのだろうか……。

「あの……。鳥栖さん。メールいたいた件ですが……。」

そう言うと、（ああ……）という顔をしながら額に手を当て「いや失礼しました……。こう言っではあれですが、とても久しぶりに皇さんとお会いしたものですから……。何かこう……。昂ぶってしましましてね。いや、そうでした。失礼、失礼……。」

「実は、皇さんにご相談したい事というのは息子の事でして……。」

「息子さん・・・？と、申しますと・・・？」

「いや、無論、一弥の事でなく、今日はその弟の方でして。」

そうだ、鳥栖家には一弥と、もう一人年の離れた男の子がいた。通夜の席で、両親の横にちょこんと座っていた一弥の弟。10歳年上の兄を本当に慕っていた・・・。声を押し殺して、涙を袖で拭きながら泣いている姿が参列者のいつその涙を誘った・・・。

俺はあんな小さな子供の心にまで一生消えない傷を与えてしまったのだ。

あれから10年・・・。

「弟の力弥の方も、今年で二十歳になりました。ちょうど、あの時の一弥と同じ年になりました。」

そう、力弥、力弥くんだ・・・。

「その力弥ですが、やはり一弥の影響もあるんでしょうか。今年に入ってから急に宗教に入れ込み始めまして・・・。」

そう言つて少し言葉を区切った。

「宗教・・・ですか・・・？」

兄の鳥栖一弥は、幼少の頃から不思議な能力を持つ少年であつたそうだ。

行方不明者のニュースを見てみると急にその所在や生死を言い当てたり、隣や知り合いの老人が明日亡くなる、と言ひ出したり・・・。こんな事は日常茶飯事だった。

しかしながら、この頃はまだ「近所の」少し変わった子”程度の存在でしかなかった。成長するにつれ一弥の異能ぶりは際立ってきて、末期がん男性の癌細胞を消し去るに至って評判は一変した。

「不治の病を治す奇跡の子供がいる」

噂は近隣に瞬く間に広まった。一弥が中学に上がる頃には、重い病を抱える人々が続々と訪れてくるようになった。そして一弥は、どんな病でも完治させた。

噂は噂を呼び、地域のテレビ局や地方新聞などでも「奇跡の子」「神の子」と一弥を取り上げるようになり、もはや一弥の下には彼一人で処理できる以上の人々が詰め掛けるようになってしまった。ついには保健所が、無免許の医療行為をしている疑いがある、と鳥栖家に立ち入り検査まで行う始末。

もともと一弥は全くの無報酬で、行っている事と言えば、せいぜい患部に手を当てる事程度であつたから、とても医療行為と言えるものでなく、疑いは簡単に晴れたのだが・・・。

「一弥は自分の時間を割いて、病に苦しむ人達に対応していました・・・。」

鳥栖氏は視線を下に落としながら話した。

「やりたい事がいっぱいある年頃に、自ら進んで病気に苦しむ人達に対応していました・・・。わが子ながら・・・本当に・・・頭が下がる思いでした・・・。」

目を真つ赤にして声を絞りだした・・・。一弥の、この“治療”は亡くなる直前まで続いていた。俺に撃たれたのも“治療”した元患者の家に訪問した帰りだったらしい。

俺は、本物の「神の子」を殺してしまったのだ・・・。

「そんな一弥を力弥は幼いときから見てきました。力弥が宗教に興味をもつのも当然の流れなのかもしれません・・・。」

話は再び力弥の件となつた。力弥には一弥の様な特殊な能力はなかったようだ。一度、一弥の墓前に訪れた際、成長した力弥の姿を遠目に見た事がある。

父親に似て華奢な体型であつた一弥は、その異能与引き換えにかなり病弱であつた。それはまるでこの世の“穢れ”をわが身に取り込むように様々な病に悩まされていた。

そんな一弥を不憫に思っていた父の弘氏が（力強く、健康に育つてほしい）と付けた名前が力弥であつた。しかしながら、力弥もや

はり一弥に似た、華奢で色白な青年であつた。

「これが弟の力弥です。」

鳥栖弘氏は上着のポケットから一枚の写真を取り出して、テーブルの上に置いた。

「失礼します」

そう言つて写真を手に取る。見覚えのある家屋の前で撮影されている。日付を見ると（2007・8・1）とある。ほぼ1年前だ。

この家は力弥の自宅である。俺は何度もここを謝罪の為に訪れている。白いコンクリート製の箱型の一軒家。

俺の記憶よりも庭先の樹木はずいぶん成長して緑が生い茂っている。俺の記憶よりもコンクリートの汚れが目立っている。そんな中に無表情にカメラの方に視線を向けている青年の上半身……。力弥だ。

（だが・・・これは・・・？）

その俺の表情をみて、鳥栖氏が話す。

「そつくりでしょう。小さな時はそうでもなかったのですが、成長するにつれてどんどん一弥に似てきました。それは19歳の時ですが、瓜二つと言つてもいい・・・」

「本当に・・・立派になられて。」

そついいながら俺は写真をテーブルの上に戻す。

「性格的にもどこか似たところがありました・・・。こう、何と云うか、自分の事よりも他人を優先するような・・・、一弥の様な能力は全く無いのですが・・・」

「そうでしたか・・・。性格まで・・・。」

「ええ・・・」

そつ言いながら、鳥栖氏は笑顔を、すつと真顔に戻して

「ところで、すめい皇さん・・・」

上体をぐつと俺の方に傾けながら言う。話題が本題に入るようだ・・・。

「はい。」

俺も上体をぐつと前傾させて聞き入る。

「最初にお話しましたが、力弥は今、ある宗教に“はまって”います。今年の春頃からですから3ヶ月くらいでしょうか。いや私が気がつかなかったただけで実際はもつとなのかもしれないかもしれませんが・・・」

「“はまっている”・・・ですか？」

「そうです。力也は自分の生活のすべての時間を、その宗教に捧げていました。・・・そして1ヶ月前、自室に書置きを残して行方をくらませてしまったのです。」

「どんな書き置きを・・・？」

「“zero^{ゼロ}に行く”と・・・。」

「ゼロ・・・。」

（はじめて聞く名前だ）

「まだ新しい・・・、新興宗教です。」

「勿論、警察には・・・？」

「ええ、届出をしました。しかし、本人が書置きを残して本人の意思で家を出ている事、力也が成人である事・・・やはり事件性は皆無ですから・・・」

「そうですね。」

勿論、警察は届出に対してはその場では真摯に対応する。しかしながら、この件では警察は動かない。元警察官として、そう思う。

「私は力弥がもう帰ってこないのではないか、と思うのです。いや、これは全くの私の勘でしかないのですが・・・。私にはどうしても彼に伝えなければならぬ事があるのです・・・。私には、あまり残された時間がない・・・。」

鳥栖氏は、そう言って絶句した。

「・・・。」

しばらく沈黙が続いた。

「皇さん・・・。私は末期の肺がんなのです。もってあと半年だそ

うです・・・。」

俺はやはりそうだったか、と感じた。年齢から来る肉の落ち方とは明らかに異なる痩せ方だ。

第1章5話：秘密

鳥栖弘氏と会った翌日、俺は、川崎溝口西口商店街の小さなアーケードの中を歩いていた。

腕時計を見る。夜10時を過ぎている。

さらに細いわき道に入る。人二人がようやくすれ違えるほどの細い路地の中ほどにその店はある。

トタン壁の古びたアパートやとうに店じまいして空き家状態の店舗の間。

「BON」

たたずまいは周りの建物と変わらないほど古い。軒先に出ている蛍光灯が切れかけ点滅している看板が、かろつじて営業中である事をアピールしていた。

手押しのドアを開ける。カランと音がする。

「いらっしやい」

入り口向かって右側のカウンターの中の老人がにこやかに笑いながら迎える。

と同時に入り口正面一番奥まったカウンター席、いつもの席に紺のスーツを着た大柄な男を見つけた。

「よう、大賀」

「よう」

白髪 of 混じり始めた短髪。真っ黒に日焼けした顔と一重の鋭い目つき、肩幅が広くがっちりした体躯。

地味なスーツを着てなければ“その筋”の人に間違われてもしようがない。

警視庁捜査1課時代の同僚、大賀龍雄だ。

コットンスーツと長髪、無精ひげの軟派ファッションの俺とは正反對の超硬派ぶりだ。

カウンターしかないこの店に通いだして俺達はもう25年になる。

そう、法律的に酒が飲み始められる年からここに通ってる事になる。

「角の水割り。ダブルで」

ここでは角は本来置いてない。いわば裏メニューだ。

これが、常連の特権。

熱いお絞りで顔と手を拭きながら

「ひさしぶりだな。元気だったか・・・」

「お前の方こそどうなんだ。名探偵。」

相変わらずの軽口野郎だ。

「まずは、お疲れ」

出てきた水割りを大賀のグラスに合わせる。大賀はいつものハイボールだ。

大賀と俺は警察入り前からの腐れ縁だ。

東京の同じ公立高校を卒業。

警察採用試験に同期合格して警察学校同期卒業。それぞれ別の地方の派出所勤務から始まった。

警察官になった時からお互いに刑事に憧れていた。

そしてお互い刑事になってからは、本庁捜査一課の刑事になる事を目標にしていた。

別の地方に勤務しながら、お互いの存在を励みにして頑張っていた。

ちょうど30歳になった時。俺はあるコロシに本庁捜査一課の応援として所轄から参加した。

その時、2係の係長であった岩倉刑事、“岩さん（がんさん）”の目に留まり、ヤマの解決とともに1課への異動が決まった。

自分で言うのも何だが大抜擢だった。

刑事は人事命令によって異動する。しかし、本庁の捜査1課だけは別だ。すべてスカウトによって全国から優秀な刑事が集められる。

捜査1課には350人以上の刑事が所属しているが、その全てが俺達と同じような経緯で配属されている。

だからこそ捜査1課は全刑事の憧れなのだ。俺の異動が大抜擢と言

われたのだ。

俺の1課入りの1年後、大賀が異動してきた時はさすがに驚いたし、まるで餓鬼の様にお互い喜んだものだ。

杯が2杯・3杯と進む。俺も大賀もいける口だ。

二人とも独身な事もあり女関係の話で一通り盛り上がる。こいつとは昔から盛り上がる話題の中身が本質的に変わらない。

「ほお、レイちゃんっていうのはそんなに美人か」

例の関内のキャバ嬢だ。

「まあな……。抜群だ。とにかくモロ好み!!」

がはは、とお互い馬鹿笑い。

ふと、時計を見る。11時30分を回っている。

（これ以上、酔うとやばいな・・・）

「ところで・・・全く別の話だ。」

急に真顔になった俺を見て、大賀も赤ら顔を引き締める。

「・・・なんだい？急に・・・」

俺は大賀に顔を近づけ目を覗き込むように聞く。

「“zero”って知ってるか？」

いきなり本題に入る。

「ゼロ・・・」

大賀は一瞬視線をはずしカウンターの中の老マスターの方を見る。

いつも通りだ。客の会話に無関心にコップを磨いている。

「なんで、お前が・・・」

俺にはこの反応で十分だった。

「今、俺が引き受けてる依頼が、この“zero”に関わる事なんだ。一ヶ月前、ここに入信したまま音信不通になってる人を探してる。」

そう言って、言葉を区切った。

しばらく沈黙の後、大賀が切り出す。

「・・・わかった。何が知りたい？」

「悪いな、いつも・・・」

俺も元捜査1課の刑事だ。情報漏えいがどのような事かは十分に分かっている。

勿論、4半世紀以上になる付き合いからの信頼があった。

捜査一課時代、コンビを組んだ。時には、ひとつ間違えば、という死と隣り合わせの極限状況も共に経験をした。

そんな時、お互いがどのような行動を取る人間かを分かっている。

「こいつは死んでも俺を裏切らない」

そう思える絆が俺達にはある。

「鳥栖弘を覚えてるか？俺が誤射してしまった・・・」

「鳥栖一弥か・・・」

「そうだ、その一弥の父親だ。その弘が今の俺の依頼者なんだ。そしてその一弥の弟の力弥が“zero”に入信して姿を消してしまった、というわけだ・・・」

「その力弥を探してくれ・・・と」

「まあ、そういう事だ。例によって警察は相手にしてくれなかったらしいがな。」

「・・・」

大賀は何も答えない。そして意を決したように口を開く。

「皇。これは今更、俺とお前の間で言うことではないが、これから俺が話すことはカク秘（極秘事項）だ・・・わかるな・・・」

俺は（何を今更・・・）と言おうとして言葉を飲み込んだ。

「皇、お前は今、警察官ではない。いわば、いち民間人だ。その立場で、あの宗教に近づくな。」

「
・
・
・
・
」

「
あの宗教
“ z e r o ”
はあまりに危険だ・
」

真夏の夜。冷房の効いた場末のバー。

俺は背中に冷たい汗が一筋流れるのを感じながら大賀の目を凝視していた。

「今俺は、あるコロシを追ってる。最初のヤマが起こったのは3年前だ。状況証拠が全て同一犯であることを示している。」

「連続殺人か・・・？」

「今までで6人。3年前が1人、去年が2人、今年に入ってからで3人だ。どんどんペースが上がってる・・・。」

そう言うと、大賀はカウンター上のハイボールを一口含んだ。

「半年で3人・・・。」

俺はそうつぶやいた後、ふと思う

（までよ・・・聞いた事がある・・・？）

「ホトケは全部若い女ばかりだ。一時テレビでも騒いでいたから、聞いた事ないか？」

ひとつのヤマを思い出した。

「内臓が抜き取られてるアレか・・・？」

大賀はだまって頷く。

マル害（被害者）は若い美人の女性ばかり。ラブホテルの一室で腹部を切り裂かれ、内臓の一部を摘出され殺害される、という連続殺人事件。

俺はカウンターの上のつぶれたマイルドセブンを取って火をつける。

大賀は黙っている。俺の質問を待っている。

「それがzeroとどういう関係があるんだ・・・？」

「ホトケに共通するのは20代の一人暮らしの女という事、そしてzeroの信者だと言うこと、この2点だ・・・。」

「なに？全員が？」

「正確には信者というより、zeroの下部組織ライフラインの従業員達だ」

「ライフライン」とは様々な業態の飲食業、サービス業を運営している営利法人だ。

まだ設立後数年であるが、若い経営者の下、マスコミ露出も積極的で、同業他社のM & a m p ; Aをテコに急成長している。傘下の店舗数は50数店舗、従業員数500名、年商100億円超で店頭公開間近と聞いている。

「あのライフラインがzeroの下部組織だと・・・。」

「関係が明るみにされれば、一発で税務署の査察モンだ。気付いてる者はほとんどいない。だが、公開されているzeroの信者数500人がイコール、ライフラインの従業員数というのは間違いない。」

「ま、ホトケは自分達がzeroの信者としてカウントされてるなんて事はほとんど自覚がないだろうが・・・。」

大賀はグラスを手に取りながら

「鳥栖力弥の搜索願いが出てる事は百も承知だ。所轄にも動くなと指示してる。どんな名目であれ警察がzeroに接近して警戒されるのを避ける為だ。」

そう言ってハイボールを一気に飲み干した。

「・・・・・・・・」

俺はそんな大賀の様子をじっと眺めていた。

（何の警告だ・・・?? 肝心の理由ははぐらかしたままじゃねえか・・・）

「それだけじゃあ、元捜査一課の刑事に危険だから接近するな、と言っ理由にはならんだろっ・・・」

俺は、ややプライドを傷つけられた思いだ。

「このコロシは手口の凶悪さも勿論だが、背後に何かとてつもない大きなものが控えている気がする・・・。お前も元刑事なら必ず分かるはずだ。そういうヤマは扱いを間違えると火傷では済まん事を・・・。」

大賀は俺の目を見る。（わかってくれ）と言っている目だ・・・。

（ここまでだな．．．こいつが今言えるのは．．．）

そう感じた俺は

「大賀、わかった．．．。参考になったよ。とにかく早く見つけるさ。」

「おお、その方がいい．．．。」

翌日非番の大賀と毎日非番“のような”俺は明け方まで痛飲した。

第2章1話：惨劇

警視庁捜査一課の元同僚、皇礼次郎と朝まで痛飲したその日の夜、大賀龍雄は自室のベッドでいびきをかいて熟睡していた。

新宿区神楽坂の1LDKの賃貸マンション。机とTVとベッド以外はほとんど何も無いがらんとした部屋だ。

いつもこの家に戻るのは寝る為だけ。家具を増やす必要性がほとんど無い。

床に乱雑に散らかっている「週間」「や」「アサヒ」「などの数冊のゴシップ誌が独身の男のわずかながらの生活感を漂わせていた。

携帯が鳴った。

しばらく反応が無かったが、やがてこそこそと片手だけ布団から出

して探る。ベット脇の机の上で昔の固定電話の様な着信音を鳴らす
携帯電話を捕まえて着信元の電話番号を見る。

「岩倉俊夫」大賀の捜査1課の上司だ。

「もしもし」

慌てて電話に出る。

「おお、悪いな非番の所。また例の殺しだ。」

ベットから飛び起きる。

「・・・・・・・・！！」

「現場は渋谷区・・・・」

住所を書き留めて電話を切る。

紺のスーツに白ワイシャツ、いつものスタイルに着替え部屋を出た。

現場は渋谷区円山町の「シャレード」というラブホテルの一室。大賀が現場に到着した時には、パトカーが数台ホテル前に停車し、刑事や鑑識がせわしく出入りしていた。

黄色い立ち入り禁止のテープが貼られ警官が立つ横を、警察手帳を見せながらホテルの玄関口に入る。玄関口右手のフロント前に立っている制服警官に部屋番号を確認すると、エレベータに乗る。

男女が2組ほど乗ればいっぱいになってしまう小さなエレベーター。

現場は4階の401号室。エレベーターホールへ出ると、フロア見取り図がある。一番右奥の非常階段に一番近い部屋だ。

廊下を挟んだ両側に部屋がある。壁や扉は淡いベージュで統一されているが、廊下は薄暗く、一部のライトが切れ掛かって点滅している。

401号室の部屋の扉は開けられ、鑑識課員が指紋採取の作業を行っている。

「じくろつさん」

そう言つて大賀はこれから目に入れる現場の様子を思つて、気を引き締めながら部屋に近づく。

見るよりも前に嗅覚がそれを知らせる。

むせ返るような血のにおい。

部屋に入る。思わず眉をしかめる。

部屋は惨劇の間と化していた。

赤黒い部屋であった。

そしてその赤は元々の部屋の色でなく、紛れもなく人間の血の色であった。部屋のライトを受け、所々がぬらぬらと輝き、また所々が凝固し始め赤黒く変色している。

犯人は被害者を殺害後、その血液を天井・壁・床・家具と部屋中に塗りたくっていた。血の赤の間から元々の壁の色であるベージュがわずかに見えている。

そして部屋の真ん中、血で染まったベットに横たわるひとときわ赤黒いモノ・・・、被害者だ。全身が血で真っ赤に染まり、腹部が切り裂かれている。

大賀をもつてしても目を背けたくなくなるほどの光景。部屋の入り口に立ち尽くしていると、肩口を後ろからポンとたたかれた。

「早かったな」

岩倉俊夫である。大賀の上司であるが、周りから“岩さん”（がんさん）と呼ばれ、大賀自身も敬意を込めてそう呼ぶ捜査一課のベテラン刑事だ。

白の半そでオープンシャツに紺のチノパンツ。その目は禿げ上がった頭とは不釣り合いな鋭い眼光を放っている。

小柄であるが、柔道の有段者として今も道場での練習を欠かさず、肩は盛り上がり、二の腕は丸太のようだ。

「ああ・・・、岩さん。お疲れ様です。」

大賀が振り向きながら言うと

「野郎、どこまで続ける気だ。」

岩倉ははき捨てるように言う。

ホテルのフロア全体に充満する血液の匂いから逃れるように大賀と岩倉は部屋から離れ、エレベーターホールで向かい合った。

「同じですね・・・。」

「ああ、今調査中だが間違いない。」

「7人目ですか・・・。」

「化けモンめ、なめやがって!!」

岩倉はすでに50も半ばを超えている。しかしながら捜査に掛ける執念は10以上も若い大賀ですら舌を巻くほどの熱さだ。

「同じって事は今回も食ってるんですか・・・?」

「ああ・・・、肝臓をな。今回も取られてる。」

汚いものを吐き出すような顔で言う。

過去6人ともに殺害現場はほぼ同様の状況であった。

壁・床一面に被害者の血が塗られ、腹部が裂かれ肝臓が抜き取られる。

そして、これはこの事件の関係者間のみに知られた事実であるが、犯人は被害者の肝臓を取り出し、その場で食べている。

被害者の肝臓の肉片が発見され、そこから犯人のものとされる歯形が発見された事があった。

もはや狂気という域ではない。

もはや人間の仕業ではない。

大賀は考えるだけで胃液が上がってきそうであった。

ふとエレベーターが開き、中から警官が飛び出してきた。ホール前にいる二人を見て叫ぶように言う

「ホシの映像が見つかりました!!」

「なに!!」

「ホテルの防犯ビデオに過去の目撃証言と一致する男の映像が写っています。今、1階のフロントで再生中で・・・」

言うより先に大賀と岩倉は階段を下っていた。

エレベーターを待つのもどこかしく全力で階段を駆け下りてフロントの管理人質に飛び込む。

部屋の隅に刑事数人が集まり、再生されたモニターの画像を見てい

る。

そのうちの一人、若い刑事が後ろを振り返り（どうぞ）というしぐさと共に大賀にスペースを開けた。

刑事達が食い入る様にモニターの画像に見入っている。大賀は開いたスペースに入り込む。

画像はホテル玄関正面上部から撮影されたものようだ。静止画像になっている。

（こいつが・・・）

岩倉がずいぶん遅れて息を切らせて入ってきた。

それまでモニターの所に固まっていた連中が、岩倉に場所を譲る。

大賀と岩倉二人は画面に顔が付くくらい近づけて凝視する。

画面には、被害者の女性と、白っぽい丸首のセーターを着たやせた若い男が並んで写っている。ホテルの玄関を腕を組んで入ってくる所だ。

第2章2話：神の遺伝子

過去6人のケースではホテルの従業員などからの目撃証言はあるものの画像は皆無であった。

「こいつが・・・」

岩倉がうなり声ともつかぬ声を搾り出す。

被害者の女性と変わらぬ華奢な体、異常に白い肌の色。

黒い頭髮は長くはないが前髪が目の部分まで届き、鼻から下の表情しか捉えられない。

笑っているようだ。大きな口。口紅を塗っているかのような真っ赤な唇。その赤い唇に縁取られた歯も妙に白い。白い肌と赤い唇のコントラストが雛人形を思わせる。

これが7人を殺害している連続殺人鬼であるとは決して誰も思わないだろう。それほど中性的な柔らかい印象である。

「男・・・でしょうか??」

大賀がつぶやく。

「・・・・・・・・・・」

岩倉は何も答えない。

画像の一時停止を解除する。

ホテルの自動ドアが開いて、二人が玄関から入ってくるシーンが再生される。画像はこのシーンの一部分を静止させて見ていたものだ。

同じシーンが何度も繰り返し自動再生される。

大賀と岩倉はそれをじっと凝視し続けている。

「人がどうかすら・・・わからん・・・」

岩倉がつぶやく。

今から2年前、2006年12月2日。

捜査一課刑事の岩倉俊夫は前日夜の連絡を受けて、朝一番で科学捜査研究所を尋ねた。

坂田陽子鑑定技官はまだ出勤していない。約束は9時であったが、岩倉は待ちきれずに8時15分には到着していた。

それは9月17日に起こった。

被害者の血液が部屋一面に塗られ、内臓が取り出されるという凄惨な殺人事件。

現場には犯人のものと思われる無数の指紋が残されていた。

逮捕は時間の問題と思われたが、警視庁の膨大なデータの中に該当はなかった。

指紋以外にも複数の体毛、体液が採取されており、それらのDNA鑑定がなされていた。

昨日その結果が出たとの連絡が岩倉に入った。担当の坂田陽子鑑定技官はいつも落ち着いていた、ややもすると冷たい印象を与えがちな話し方であるが、昨日は少し興奮したような話し振りであった。

岩倉は妙に気になって早く目が覚めてしまった。

いつもは事務所の端の打ち合わせ用スペースに通されるのだが、なぜか今日はひとつ隣の応接室に通された。こんな事も初めてであった。

壁にかかる時計を見る。8時30分を少し過ぎた所だ。まだ到着してから15分しか経っていない。とても長い15分だ。

ソファに座ったまま応接室の中を眺める。質素な応接ソファとテーブル、落ち付いた感じの薄いグレーの壁にはルノール風の淡い色の絵がかけられている。

時計の秒針の音だけが妙に大きく響く。

「ごめんなさい、お待たせしちゃって。」

ノックの音とほとんど同時にドアを開いて坂田鑑定技官が入ってきた。

「いや、こちらこそ少し早すぎたようで・・・」

岩倉もソファから立ち上がりながら言う。

「どうぞ、おかけになって・・・。」

そう促されソファに腰掛ける。

170cm近い長身にやや栗色がかった長い髪、銀縁の眼鏡に、グレーのピンストライプのパンツスーツ。顔に化粧気はまったく無いが、長い睫の大きな瞳とツンとした鼻。まぎれもない美人だ。

「ところで・・・。」

岩倉がそう切り出すと

「どうやら、ゴリラやチンパンジーの類ではないようね。ましてや猛獣の類でもないわ。」

岩倉の鋭いまなざしに坂田は全く臆するそぶりも見せず言う。

警察はあまりに残虐な殺害方法から犯人像として、人間以外のサルやゴリラひいてはその他の猛獣類の可能性まで視野に入れていた。

「まあ、それはそうだろう・・・。」

岩倉はそんな結論は百も承知だった。とても人間業とは思えない残酷な殺害方法であるが、人間でしか成しえない殺害方法でもあった。

「それで・・・、分析結果は・・・？」

岩倉が結論を促すと、坂田は眼鏡の奥の長い瞳に縁取られた、大きな、美しい瞳でじっと見据えた。

「・・・・・・・・・・」

しばらくの沈黙の後、坂田が切り出した。

「詳細はこの報告書を見てくださればわかります。でも最低限の事はここでお話するので理解してください。」

そういつて、白い書類袋を岩倉に渡した。

「まず、人間同士は99・9%が同じDNAで構成されています。私たち人間の個体差は残りのたった0・1%の差によるものなの。これがたとえばチンパンジーやオランウータンと人間との差になってくると99%弱、それでも1%程度の違いでしかないの。」

「・・・・・・・・」

「つまりDNA鑑定をすれば、人間同士であれば99・9%のDNAは一致、サルなら99%は一致するって事！」

いかにも理数系に弱そうな岩倉の表情を見て坂田は少し語気を強めた。

「結論から言うと今回調査した犯人のDNAの一致率は99・5%。つまり人のDNAとの間に0・5%の誤差が認められたのよ。これ、どういう事???サルより人間に近いけど人では無い???こういう事なのかしら??」

「どういう事だ??」

「私の方が聞きたいわ。こんなDNA初めて見たわ。この件で科捜研内は持ちきりよ。」

坂田は最初に見せた冷静な科学者の姿から熱い研究者の姿になっていた。

そんな自分の姿に気が付いたのか、急にたたずまいを元の冷静な科学者の姿に戻して言った。

「今の所の仮説として、私たちはこのDNAの持ち主を人間の突然変異種と位置付けています。」

「突然変異・・・？」

「誤解しないで。ミュータントとかそういう意味ではありません。突然変異は生命の維持に全く影響を与えない無害なものと、生命が維持できなくなるほどの悪影響をもたらす2種類があつて、それ自体は珍しくはあるけれど括目するほどのものではないわ。でも、ごく稀に現状の種より優れた性能を示す変異が起こる事があるの。これがいわゆる“種の進化”だと言われているわ。」

「つまり・・・？？」

「つまり・・・？結論なんかありません。ただ私が言いたいのはこの0.5%はあくまでも人間との差であり、それがよりチンパンジー側の0.5%なのか、つまりマイナス0.5%なのか、それとも人間以上の“何か”側への0.5%であるのか、つまりプラス0.5%なのかは、わからない、という事。人のDNAと差異が認められるから全て人より劣った生き物だと考えるのは人間の驕りだわ。」

「・・・・・・」

そう言うと坂田は岩倉から視線をはずし、やや虚空を見上げるような表情でつぶやいた。

「こんな言い方は変だけど、このDNAの独特の塩基配列の美しさ・。うまく言えないけれど調和美と言えいいのかしら・。何かこう・。神々しいような・。」

その姿を整理のつかない頭のままぼんやりと見ていた岩倉には

（神の遺伝子）

そんな言葉が浮かんでは消えていた。

「それから、現場で発見された肉片の件だけど・・・」

血にまみれた殺人現場からは犯人の指紋・毛髪・体液などの他に、取り出された被害者の肝臓の一部と見られる肉片が発見された。

その肉片は大半が引きちぎられた状態でごく一部でしかなかった為、これも確認の為に鑑定に回っていた。

「被害者の肝臓の一部で間違いがないわ。それと・・・」

坂田鑑定技官は美しい顔の眉間をひそめながら

「肉片から歯型が発見されたわ・・」

「なに!!」

岩倉は思わず、ソファから立ち上がった。

坂田は岩倉の“さま”をソファに座ったまま冷静に見上げながら

「歯型は勿論、被害者のものではないわ。それと肉片からは相当量の唾液も採取されています。犯人は被害者の腹部を裂いて肝臓を取り出した後、その場で食べているわね・・・・。」

「・・・・・・・・!!!!」

岩倉は絶句した。

（人間の突然変異）

（食人）

鑑定から導き出されたあまりにも恐ろしい犯人像に、岩倉は身震いを抑える事ができなかった。

第2章3話：メタバパンチ刑事登場！！

警視庁捜査一課時代の同僚、大賀龍雄と朝まで痛飲した翌日の午後、俺は今名古屋にいる。

新幹線の改札口を出て駅前の駐車場に向かう。捜査一課に着任する前、一時期ではあるが名古屋市内の中村警察署に所属した経験がある。今日はその時の後輩、大石大吾に会うことになっているのだ。

腕時計を見ると14時を15分過ぎている。遅刻だ。

駐車場で後輩の車を探す。確か白のクラウン、愛知県だけにやっばりトヨタ車だ。

名古屋駅前の駐車場は、中村警察の目と鼻の先だ。

現役刑事が、いかに元刑事とは言え、探偵と会っているのを見られるのは、痛くも無い腹を探られると考えたのだろう。待ち合わせ場所は大石の車の中、となっていた。あいつも多少は成長したようだ。

愛知県は本当にトヨタ車が多い。そして白が多い。だから大石の車は本当に見つけにくい・・・。

あれ・・???

前方に車の横に立つて両手を振っている大男がいる。

大石だ。

なんの為の車の中での待ち合わせだ。大目立ちじゃねえか・・。

少し歩みを速めた。まだ手を振ってやがる・。パンチパーマに金糸で刺繍が施されたど派手なＴシャツ、相撲取りの様な腹と、丸太のような腕。ほとんどヤクザだ。

大賀といい、なんで、刑事っていう人種はこういうのが多いんだ。いまどきどこでパンチパーマかけてやがる。

「どうも皇さん、ご無沙汰しております!!」

身長190cm近いパンチパーマが深々と頭を下げる。体もでかいが、声もでかい。近くを通る人がびっくりして俺たちの方を見ている。大目立ちだ。

「おお、元気か。」

俺はできるだけさりげなく声をかける。

「いやあ、先輩、すっかり探偵っぽくなっちゃいましたね!!」

（おい、パンチ!!声がでえよ。）

そんな事を思いながら、

「車の中で話すか」

パンチパーマを車の中へ押し込む。

車を走らせながら、パンチこと大石大吾はしゃべり続けている。もう40近いはずだが相変わらずだ。

俺と大石の付き合いは大石がまだ派出所勤務の時から始まる。とあるヤマで人手が足りなくなって、派出所から応援に来たのが大石だった。その頃はまだスリムな好青年だったのだが……。

本人は刑事になる気満々でかなり張り切っていたようだ。若さに任せて寝食も厭わず捜査に協力していた。

そんな姿は、鈍感な俺も気付いていたし、同僚のベテラン刑事も同じだった。捜査終了後、上司に大石を推薦したのは、その同僚のベテラン刑事だったが、大石はなぜか俺が口添えしてくれた、と思い込み、中村署に異動後も何かと俺にまとり付いて来た。

当時の俺はまだ20代後半でそんな力はあるはずないのだが、俺を慕ってくれる後輩がいる事は何かと便利だったのでそのままにしておいた。（笑）

今日は久しぶりの再会だ。大石も少しは興奮しているのだろう。

とは言ってもそろそろ黙らせるか・・・。

「おい、大石。ところで・・・」

「ああ、すいません、先輩。なんだか俺ばかり話しちゃって・・・」

（まったくだ。しゃべりすぎだお前は）

「俺が名古屋に来た目的だが・・・」

「ええ、わかってますよ。zeroですよ。大丈夫っす。本庁の大賀さんのトコからはあんまり突付くとは言われてますが、他ならぬ皇先輩の頼みですから!!」

「そうか・・・すまん。」

「なーに!!! 任しといてください。皇礼次郎仕込みの捜査テクニクで一発です!!!」

こいつのこの調子の良さが心配だ・・・。

「ところで今の段階でzeroに関して何かお前が知ってる事はあるのか？」

車は小さな裏道を抜けて、国道に入ろうとしている。車の通行量が多い。パンチはその髪型に似合わぬつぶらな丸い瞳と顔をせわしく左右に動かしながら割り込める車の間隔を探して車を右折させる。

国道に入って直進になってから、パンチが答える。

「うーん・・・。そうですね・・・。俺も先輩から連絡もらって調べてみたんですけどねえ・・・。まあ、俺の親戚にzeroの初期の頃の信者だったモンがいるらしいんですよ。そこらあたりから少しは情報引つ張れるかな、と思つとります。」

（まだ何もわからないという事だな・・・）

「ああ、それと・・・」

「うん??」

「zeroの教会のあるT村ですけど・・・。一時は村の半分がzeroの信者みたいなモンだったらしいですよ。」

（ほうう・・・。いい情報を持っているじゃないか。パンチ君）

「ほうう。半分が。T村つてのはどれくらいの人口なんだ??」

「3000つてところです。今はそれほどでもないようですが、以前は随分活発に活動してたらしいです。」

（大賀曰く、今のzeroの信者数は500つて所だから、随分縮小してるって事だな）

「まあ先輩、大丈夫ですよ。俺もだてにこの辺で長年刑事やってるわけじゃないですから。うまい具合にzeroの情報集めて、皇さんにお伝えしますよ。」

「ああ。悪いな。できるだけ早くもらえると助かる。」

「任しといてください!!」

そう言うとパンチはCDプレイヤーのボタンを押す。流れる音楽は「永ちゃん」だ。

体を揺らしてノリノリのメタボなパンチ野郎の横で俺はシートを倒して目を閉じる。

「近くに来たら起こしてくれ」

「OKっス!!」

「永ちゃん」の音楽が正直、うるさい・・・。

「皇先輩！―もうすぐですよ！―起きてください」

「・・・・・・ああ？？・・・・・・おう。」

のそのそとシートを起こす。

車外はすっかり田畑風景、ここがT村か。大石と車の中で打ち合わせがてらzeroの教会まで案内してもらった事になっていた。

「先輩、前の方にインドの寺みたいなのが見えるでしょう？あれがzeroの教会ですよ。」

両側を青々とした田畑で挟まれたゆるやかに下る一本道。その遠い前方右側に、周りを塀に囲まれ、金色のウニコ屋根をしたインド寺院のような建物が見える。

「あれか……」

「こんなド田舎で目立つでしょ。それにしてもセンス悪いっスよねえ!!」

お前に言われたくない。

「zeroってのは、あれか……。インド仏教が教義なのか?」

「さあ……。どうなのでしょうねえ??代表者は日本人ですけど・。
」

公開されている資料によれば、zeroの代表者は倉藤恭一くわとうきょういちという

人物だ。まあ、日本人には間違いない。

車は、zeroの教会に近づいていく。金色のウンコ屋根が光を反射してまぶしい。

でかい。近くで見るとその巨大さがよくわかる。周りは田畑ばかりで建物が一切無い為、よけいそう感じる。

車を教会の門の前に止める。教会の周りは高いコンクリート塀で囲まれ、さらに塀の上部には鉄条網が付けられている。まるで刑務所の塀のようだ。

閉じられた黒い巨大な鉄製の門にはミケランジェロの「地獄門」の様なレリーフが施されている。

インド風の寺院、キリスト教を思わせる門。いったいzeroってのはどういう宗教なんだ。

そしてこれほどの巨大な教会。いったいこの建設費用はどこから出ているのか？やはり大賀の言うようにライフラインとの繋がりが？

車外に出る。盆地の丁村はムツとする暑さだ。

教会の周りをパンチと一緒に一回りしてみた。塀の所々には監視用のカメラが設置されている。本当に教会らしからぬ警備ぶりだ。こんな周りが田んぼだけの所で一体何をそんなに警戒しているのか。

「いやあゝ。それにしてもでかいですねえ。宗教っていうのはやっぱり儲かるんですかねえ。」

メタボのパンチは暑い所がやっぱり苦手な様だ。少し歩いただけなのにもう大汗かいている。

ぐるりと一回りした所で、再び門の前に立った。

宗教法人 零式

これが正式名称なのだろうか。門柱に毛筆でこう書かれた木製の大きな表札がかかっている。こんどは純日本宗教風だ。

建物の感じ、門の感じ、そしてこの表札の感じ……。何かこの宗教は、捉えどころが無いというか……。ちぐはぐな感じを受ける。

よく見るとインターフォンがある。ボタンを押してみる。

「ちょ……。先輩、やばいっすよ!!」

「大丈夫だ。」

しばらくすると若い女の声で

「どなた様でしょうか?」

と、きた。

俺は落ち着き払って

「あ、秘書の方でらっしゃいますか？突然、申し訳ありません。私、宗教ジャーナルの門倉と申しますが、代表の倉藤さんおいででしょうか？」

と言うと間髪いれずに

「いえ、私は事務のものなのですが……。倉藤先生は今外出していらっしゃいます。今日はもう戻らないと思いますが……。」

「そうですか。それでは結構でございます。先生にもよろしくお伝えください。」

そう言うところインターフォンは何の反応も無く切れた。

俺はパンチに行くぞと目で合図をして門を離れる。

お互い無言で車に乗り込んだ所でパンチが素っ頓狂な声を上げる

「いやあゝ先輩！驚きましたよー！！倉藤がいたらどうするつもりだったんすかー！！」

「その時はその時さ。ただ、ひとつわかった。」

「・・・・・・？」

パンチは車のエンジンを入れながらその顔に似合わぬつぶらな瞳を瞬かせて俺を見ている。

「あの対応に出た事務の女。倉藤の事を“先生”と呼んでいたろう。信者の中でも教団内部で働くって事はかなり“深い”部類の信者のはずだ。そんな奴は自分の信仰する宗教の教祖を“先生”とは決して呼ばない。俺はzeroってのは倉藤が教祖だと思っていたが、そうではないようだ・・・。」

「おお～！なるほど！！確かに！！さすがは皇先輩！！」

！マーク連発だ。パンチはこちらが気恥ずかしくなるほど大げさに関心する。

走る車の窓から景色を眺める。

「しっかしここは・・・。」

鳥栖力也を探すために、zero教会の周辺の住民にでも探りを入れるつもりだった。が、周辺に住居らしきものがまったく見当たらない。遠くに風除けの樹木をまわりに巡らせた民家らしきものがぽつん・ぽつんと確認できるが、見渡す限りの田畑だ。

驚くべき人口密度の低さ。

（パンチからの報告に期待するか）

後日、メタボなパンチ刑事は予想をはるかに超える良質なレポートを俺にもたらししてくれる。

当然そんな事は、この時は予想だにしていなかった。

第2章4話：圧力

7人目の犠牲者が出てから2週間後。大賀龍雄は所轄の渋谷署に設置された本部のデスクで捜査書類に目を通していた。

通常であれば朝の捜査会議が行われるはずの時間であるが捜査一課長、係長や所轄の署長といった捜査本部の幹部連中が別室の会議室に籠って出てこない。

今回の捜査に関する何か重大な事案でもあったのか、捜査員全員が待機を命じられていた。

昨日の捜査会議では、今回の殺人事件に関する地取り（事件現場周辺の聞き込み）や鑑取り（被害者の関係者に対する聞き込み）の結果報告、今後の捜査方針の確認が行われた。

今回の被害者も前6人同様、ライフライン関連の飲食店キャバクラに勤める女性であった。

直接の原因は腹部を鋭利な刃物で切り裂かれ、肝臓を取り出された事による失血死。つまり被害者は生きたまま腹を裂かれ、肝臓を取り出された、という事だ。これも又、同様の手口だ。

同一犯である事は残された指紋などから疑う余地はなかった。問題

はその動機であつた。

捜査本部では既にライフライン社に対する怨恨の線を有力としていた。

ライフラン社はその急激な拡大に伴う強引な経営手法が元であちこちでトラブルを抱えていた。大賀らはその一つ一つを丹念に調べ、つぶしていった。

先日の会議ではそれらの報告がそれぞれの捜査員からなされたが、決め手となる有力な情報や線は見えてこなかった。それでもう一步捜査の範囲を拡大して利害関係者を当たる事となり、zeroもその利害関係者の中に上がっていた。

捜査会議開始予定時間から1時間が経過した頃、ドアが開いて、真藤源一警視庁捜査一課長、石打巖係長、所轄である渋谷警察署長、副署長が入ってきた。

「よし、それでは会議を始める。起立・礼」

捜査会議の司会は石打係長である。

「まずは地取り。1区。」

会議はまったくいつもの内容で進行した。わざわざ捜査会議前に幹部会議を一時間も行ったので、参加した捜査員全員が何らかの重大な発表があると考えていた。

鑑取りの結果報告が一通りなされると真藤課長が総括をして終了となる。

「今回のヤマはマスコミも連日大きく報道しており、社会的注目度も極めて高い。事件の一日も早い解決の為、捜査員一致団結して臨んでもらいたい。」

会議は終了した。何も変わった事はなかった。

席を立とうとした所で、

「岩倉班、ちょっと集合してくれ」

と声を掛けられた。岩倉班とは岩倉主任警部補をチーフとして大賀達が所属する5人の捜査班である。

真藤捜査課長、石打係長が座る机の前に岩倉を除く4人が集まった。

「今日は岩^{がん}さんは名古屋か。」

石打係長が言った。

「zeroの教会に行かれてます。」

大賀が答える。

岩倉班は昨日の捜査会議で正式にzeroの担当となった。

「昨日の今日で悪いが、岩倉班は再度マル害（被害者）の鑑取りに回ってくれ。」

「は・・・い？」

大賀が裏返った様な声を出すと、腕を組み目を閉じていた真藤課長が口を開いた。

「さきほどの幹部会議で、ライフラインの利害関係者における zero の捜査優先順位は極めて低く、捜査員を班単位で投入する必要性は低いとの判断に達した。これはその判断に基づく命令だ。」

真藤課長がそう話すのを見ていた石打係長が大賀らの方を向いて言う。

「一旦君達が他班に引き継いだマル害の鑑取りは又、引継ぎ前の担当に戻す。以上。」

そう言うつと会議室から二人とも出て行ってしまった。

大賀ら4人は誰も座っていない机の前で立ち尽くしていた。

「大賀さん・・・」

岩倉班で一番若い捜査員である二階堂孝之が大賀に複雑な顔を向け

る。

大賀はワイシャツの胸ポケットから携帯を取り出す。

携帯電話を耳に当てながら会議室の窓の外に目をやる。

夏の強い光が道路に照り返し、陽炎の様に地面近くの光景をゆらゆらと揺らしている。今日も暑い。

「もしもし」

ほとんど着信音が鳴らずに電話が取られた。岩倉である。

「大賀です。今、大丈夫ですか？」

「おお、どうした。」

「今、真藤課長と石打係長から班の担当の変更を言われました。Z
eroへの捜査はいったん中止だそうです。」

「.....」

携帯電話の向こうは何も反応しない。岩倉は無言で大賀の話を聞いている

「……？。もしもし・岩さん、聞いてますか？」

「おお、もちろん聞いている」

「……？？。ひょっとして、もうお聞きになられていますか？
今回の件。」

「いや、聞いていない。すまん、その件はまた後で話そう。切るぞ。」

そう言って電話は切れてしまった。

大賀が再び岩倉と電話で話したのはその日の夕方であった。今度は岩倉のほうから掛かってきた。

夜ひさしぶりに一杯行く事になった。岩倉から誘われるのは珍しい。

新橋の烏森口を出てJRのガード沿いを歩くと、脇の狭い路地には昭和の香りを残す飲み屋がちらほら残る。

そんな脇道の一つを入ってすぐ右側に、入り口がちょうど電柱の陰になって、角度によってはそこにあることが全くわからない小さな飲み屋がある。大賀と岩倉の行きつけの飲み屋「ライムライト」だ。

大賀は引き戸式の扉をガラガラと開けて中にはいった。

「いらっしやいませ」

もう70を超えている女主人の張りのある声が店内に響く。店は奥に長い縦長で10人も入れば満席のカウンターののみ。客の座る後ろを力二歩きの様になって歩かなければならないほど狭い。

客の入りは半分ほどであるがカウンターの一番奥、いつもの席に岩倉の姿が見える。岩倉も大賀に気付いて軽く手を上げている。

「どうも、お疲れ様です。」

そう言いながら岩倉の横に座ると、熱いお絞りとビンビール、枝豆が出てきた。勝手知ったる、というやつだ。

「お疲れ」

岩倉が、ビールを大賀のコップに注ぐ。きめの細かい泡があふれる。

大賀はそれを慌てて口で受ける。岩倉はいつもの焼酎のロックだ。

「名古屋はどうでしたか・・・？」

岩倉はzeroの調査の為、さきほどまで名古屋に出張していた。

「おお・・・。」

岩倉はそう言っただけで焼酎を一口つけると、灰皿に置いたタバコを吸う。いつもエネルギーギッシュな岩倉であるが、今日はかなり疲れているようだ。

大賀も胸ポケットからタバコを取り出し火をつける。

しばらく二人ともどこを眺めるでもなくそのまま無言でタバコを吸っていた。

「そつえば今日はすまなかったな。」

先に切り出したのは岩倉の方だった。大賀からの電話を一方的に切ってしまった事を言っているのだろう。

「いえ、こちらこそ忙しい所すいませんでした。」

岩倉はかるく頷きながら

「お前、今回の件をどう思う？」

と聞いた。

“今回の件”とは言つまでもなく担当変更の件の事だろう。

「さあ……。正直、何かなんだか全く……。」

「うむ。」

岩倉は頷き焼酎を一口付ける。

「さつき、石打と話をしたよ。はっきりとは言わなかったがどうも何処からか圧力がかかったらしい。」

岩倉と石打は役職上は上司と部下であるが、同期という事もあり、お互い「石打」「岩さん」と呼び合う間柄であった。

「圧力……ですか？」

大賀は思わず岩倉の方を見た。

店頭公開間近と言われている株式会社ライフラインへの捜査を本格化させた頃から、国会議員を始めとする様々な利害関係者から有形・無形の圧力が捜査本部に掛けられている、という話は聞いていた。しかしながら実際にライフラインへの捜査方針が変更になる事はなかった。

「今回よほどの大物が関わっているという事でしょうか？」

岩倉は大賀の方を見るでもなく、タバコの煙を吐き出しながら言う

「だろう……な。zeroっていう宗教には俺も驚くような連中が信者になってる。あんな田舎の宗教にいったい何があるんだ、と思うよ。」

大賀はこの時、岩倉が何か掴んでる、と感じた。理由はない。

「何があるんですか・・・？」

「わからん。だが、あの宗教には、日本や海外の政財界の大物達から定期的に“お布施”が入っている。一個一個の金額は大したことはないが、全部あわせれば膨大な金額だ。あの顔ぶれを見れば今回くらの芸当は朝飯前だろうよ。」

そう言っただけで岩倉が語った面々は驚くべきものであった。日本を代表する多国籍企業の創業家や上場企業のオーナー経営者といった資産家達、国会議員の中には何と首相経験者からアメリカの元国務長官の名前まであった。

「結局、近づく事すら許されない、って事なんですか・・・」

「・・・・・・・・・・」

岩倉は黙り込んでしまった。

第2章5話：教祖1

目を覚ました。壁の時計を見ると、夕方の6時を過ぎている。外はまだ明るく、西日が窓から差し込んできていて眩しい。

事務所のソファの上に横になっていてそのままうとうと眠ってしまった。こんな蒸し風呂みたいな部屋の中でよく眠れたものだ。我ながら感心する。

机の上に置いた携帯電話のランプが点滅している。着信があったようだ。

のそのそと上半身だけ起こし、思いっきり手を伸ばして携帯を手にする。着信履歴を見るとメタボなパンチ野郎、大石大吾からだった。留守番電話が入っている。

「あ、先輩っすか、大石っす。頼まれたzeroの件、メールしてきましたんで見といてください。それでは又何かありましたら、声掛けてください。失礼しまっす。」

どう考えても40男の残す留守電ではない。

あれから2週間。そろそろ来る頃だと思っていた。

ソファから起き上がると扇風機のスイッチを入れた。体中汗まみれだ。尻ポケットからハンカチを取り出して汗をぬぐいながらパソコンを起動させる。

メールソフトを起動させると何通かの迷惑メールと依頼のメール・・・、おっと残念、依頼メールの方は今日は来ていないようだ・・・。

（これだ・・・）

大石からのメールだ。今日の16時15分に送信されている。

（クリック、と）

皇さま

先日はお疲れ様でした。

ご依頼の件、調べてみました。

詳細は添付ファイルを確認下さい。

大石

添付ファイルには書類以外に画像も添付されている。パンチの奴、張り切ったな。

宗教 zero に関して

zero 設立経緯（時系列）

・昭和35年：宗教法人献霊会設立。代表者：佐分利はつ。さぶり 本部所在地：岐阜県恵那郡 x 町・・・

・昭和63年：代表者死去に伴い変更。新代表者：佐分利那美。さぶり

*この新代表者は、佐分利はつの娘であるとの事

・平成3年：代表者・本部所在地変更。新代表者：村上^{はしめ}一。新本部所在地：東京都港区芝浦・・・

*この変更で宗教法人献霊会は所有者が佐分利家から離れる。新代表の村上一は当時医療法人徳療会 倉藤記念病院の事務局長も兼任。

・平成12年：法人名を宗教法人^{せうしゆじん}零式と変更。又代表者・本部所在地も変更。新代表者：倉藤^{くらとう}恭一^{きょういち}（現任）。新本部住所：愛知県海部郡丁村・・・

*現代表倉藤恭一に関して

昭和30年東京都出身。京都大学医学部卒業。大学卒業後国立遺伝子学研究所に勤務。平成12年に同研究所退職後、現職。ちなみに前代表村上一が事務局長を勤める倉藤記念病院の病院長^{くわんとんひょうちやう}倉藤兵衛は現代表の父親である。なお、倉藤恭一氏の顔写真を添付。“画像ファイル1”参照の事。

（こりゃ・・・予想外だ・・・）

ここまで読んで驚いた。パンチの奴、予想外に頑張ってる。

報告書と一緒に画像ファイルが2枚添付されている。倉藤恭一の方の1を開ける。

まるで免許証の証明写真のように真正面から撮影された顔写真が現れた。これが倉藤恭一か・・・。

やや俯きぎみで上目使いにカメラの方を見ている。昭和30年生まれと言うから今は50を越えているはずだが、写真の顔からは30代くらいにしか見えない。まあ、かなり前に撮影されたものかもしれない。

乾燥した質感の皮膚。細面で色白の顔。髪は整髪料でオールバックに撫で付け光っている。試合後のボクサーの様な腫れぼったい細い目。蛞蝓なめくじの様な色の悪い薄い唇。

爬虫類のような顔だ。

顔の作りもそうだが、この男が纏っている雰囲気が一層“そう”思わせる。

zeroの宗教法人としての歴史は思ったより古い。ただ、初代・2代目の代表である佐分利家と現代表の間には全く繋がりはないだろう。

これは俺の勘だが、平成3年の変更は医療法人徳療会の税金対策だろう。宗教法人の税金面での優遇振りに目をつける輩は後を絶たない。宗教法人専門のブローカーが存在するほどだ。そんなブローカーあたりから徳療会が献霊会を購入し、その代表に金庫番の村上が納まった、ってのが図式だろう。

という事はその後の愛知県への移転やあの巨大な教会は何の為に・・・？。

国立の研究所勤務だった倉藤恭一が、なぜ宗教法人の代表など全くの畑違いにおさまったのか・・？

平成3年に倉藤記念病院の税金対策の道具となっていた（であろう）宗教法人献霊会は平成12年に名前・本部・代表を変え対外的には全くの別物となっている。

ここで“何か起きた”のだろう・・。

zeroの教義に関して

・佐分利はつ設立当初の教義は不明。現代代表倉藤恭一氏代表就任後は「不老不死」を目的ないしは奥義としていた模様。詳細は不明。

zeroの教祖

・代表倉藤恭一氏とは別人。平成12年より頻繁に信者の前に姿を見せている。男性。平成12年当事で20歳前後と思われるが氏名含めた詳細は不明。空間から物質を出現させたり、近い将来の出来事を予言したりと数々の奇跡を見せた模様。愛知県丁村における信者数の爆発的な増加は、この教祖の見せた「奇跡」による所が大きい。

い。平成14年以降公の場には姿を現していない。理由は不明。

*平成13年撮影の教祖の写真を添付。“画像ファイル2”参照の事。

添付されている2つ目の画像ファイルにカーソルを合わせてマウスをクリックする。

かなり重い画像なのか、まるで紙芝居の絵を下からゆっくりと引き抜くように、上部から少しずつ画像が現れる。

頭髮が見え始める。これも代表の倉藤の様に正面から撮影されたものの様だ。

やがて額が見え、目が見え鼻・口・・・と顔全体が現れる・・・。

ドクンッ！

大きく心臓が音を立てる。

(これは・・・!!!!)

額から脂汗が吹き出る。背中に流れる汗がシャツに張り付く。

画像はついに被写体の上半身を写した全体像を見せた。

右下に見える画像の日付けを見る

2001年3月13日

今から7年前、平成13年に撮影されたものの様だ。

思わず皮膚が泡立つ。

「・・・・・・・・!!」

携帯のアドレス帳から大石の番号を表示して発信ボタンを押す。

呼び出し音が何度か鳴る

（出る!!大石・・・・・・・・!!早く・・・・・・・・!!）

「もしもし・・・」

呼び出し音が10回を超えた所で大石が出た。

「大石か、皇だ。今、送ってもらったzeroの教祖の写真を見る。この写真の日付は正しいのか・・・?」

俺は息継ぎ無しで一気にしゃべっている・・・。

「ああ・・・先輩・・・」

俺の早口とは正反対ののんびりした口調・・・。

しばらく間が空いた。

「ああ・・・。思い出しました。そうなんです、それなんですけどね。結論から言わせてもらいますと間違いないっす。いえ、どうしてかと言いますと・・・。」

長くなりそうなので途中で電話を切った。すぐに携帯が鳴った。大石からだ。

昔の電話機のような携帯の着信音が鳴る事務所の中、俺はパソコンの中の画像から目を離せない・・・。

そこには7年前の2001年には存在するはずのないものが写っている。

（ばかな・・・）

zeroの教祖として無表情にカメラを見つめている男の顔・・・。

PCの中から俺を見つめている男・・・。

俺が見間違えるはずがない・・・。

今でも夢の中で毎日見ている顔・・・。

それは間違いなく鳥栖一弥であつた・・・。

第2章6話：教祖2

携帯の着信音が鳴る

その音で現実に戻る。

しばらく放心していたようだ。

PCの中の写真は相変わらず俺を見ている（ように見える）。

携帯を手にとると大石からだ。さっきからずっと鳴らしているのだからつか。

「もしもし……。」

「ああ、先輩。大丈夫っすか。ずいぶん……。」

「悪い大石。ちょっと今、手が放せない。またこちらから掛ける。」

そういつて電話を切った。（悪いな・・・大石。）

腕時計を見る。7時か・・・。

しばらく携帯を手に持ったままどうするものか迷ったが結局PCのメールソフトを再び立ち上げる。

鳥栖弘氏への連絡はよほど緊急の場合を除いてはメールで、という事になっていた。今回の俺への依頼は奥さんには秘密にしている、との事だった。そりゃそうだ。俺の声を聞いたら、又あの時の思いが蘇ってしまう。

鳥栖弘様

お尋ねしたいことがあります。このメールをご覧になりましたら、何時でも結構です。私の携帯の方に連絡をいただきたいのですが、
よろしく願いいたします。

皇

そう打ち終わってすぐに携帯が鳴った。俺はびくつとして携帯を取り発信元を見る。鳥栖弘氏からだ……。早い。

「皇です、申し訳ありません。わざわざお電話いただきまして。」

「いえ、丁度今日は妻が友人と出かけてまして。今、私一人なんで

すよ。それで・・・、何かありましたか。」

俺は思ったより落ち着いた感じの声だな、と感じながら答える。

「ええ、まだはつきりした事はお伝えできないのですが一つお願いがありまして・・・」

「はあ・・・、お願いですか。」

「はい。実は力也君が13歳の頃の写真を見せていただきたいのですが・・・。」

「13歳・・・ですか。こういう言い方はあれですが、こう・・・ずいぶん具体的と言うか・・・。どうしました・・・？何かあったのですか・・・？」

「ええ、どうしても確かめなければならない事があります。その為にはどうしても必要なのです。」

「……そうですか。わかりました。PCの中に保存してある写真の中から写りのいいやつをお送りしましょう。それで大丈夫ですか?」

「もちろん。ありがとうございます。」

「皇さん……」

「はい……?」

「必ず……。いえ……。宜しく願います。」

「……わかりました。必ずご報告します。それでは……」

俺は出来るだけ静かに携帯を切った。

やはり俺からの連絡を心待ちにしている所があったのか。最後に何かを言おうとしていたが……。

鳥栖弘氏の穏やかな声を聞いている内に、ずいぶん気持ちも落ち着いてきたようだ。天蓋孤独の俺にとって父性溢れる声は心地良いし、心が落ち着く。

と、同時に冷静な判断力が戻ってきた。

鳥栖一弥の容貌は、弟の鳥栖力也と非常によく似ていた。俺が鳥栖弘氏から見せてもらった今の力也の写真は少なくとも一弥と瓜二つ、と言ってもいいほどであった。

（成長するにつれてどんどん一弥に似てきました。 . . . 瓜二つと言ってもいい . . . ）

ルノアールでの鳥栖氏の言葉を思い出す。

初めて写真を見たとき俺は気が動転してしまった。

これは間違いなく一弥だ、俺が見間違うはずがない、と考えたが、よくよく冷静になれば一弥は司法解剖まで受けている。何よりも死体は俺自身が確認している。

鳥栖一弥は間違いなく1998年に死亡している。2001年に撮影されるはずがないのだ。

zeroの教祖という青年の写真は、鳥栖一弥の弟、鳥栖力也の2001年当時つまり、13歳の頃を写したものだろう。

なぜ力也が13歳の時にzeroの教祖として姿を見せていたのかはわからない……。鳥栖弘氏曰く、彼がzeroに関わり出したのはこの数ヶ月との事だった。

何かの事情があつたのだろう。

これは今後調べていくしかないが、何にせよ・

（あせって損した。肝冷やした……）

俺は額を（ぺんっ）と音を立てて叩いた。（ちょっとオヤジっぽい
しぐさだが・・・まあオヤジだからしょうがない・・・。）

壁の時計に目をやる。8時過ぎか・・・。

窓の外はようやく闇に包まれ始めた。

「件名：写真送ります」

鳥栖弘氏からメールが届いた。画像ファイルが一枚添付されている。
早速送ってくれたのだろう。

（どれどれ・・・）

メール本文を確かめずにまずは画像ファイルを開けてみる。

・・・ピースサインをしてよく日焼けした坊主頭の少年の画像があらわれた。

（あれ・・・？）

鳥栖氏からのメールを読む

皇さま

ご依頼の写真をお送りします。この前お見せした力也の写真とはあまりにイメージが違う事に驚かれるのではないかと思います。

13歳の頃の力也は、私の勧めもあり毎日夜遅くまで部活動の練習づけの野球少年でした。

先日お見せしたような容姿になったのは本当にこの2、3年の話です。中学を卒業するまではずっとこんな感じの子供でした。

何かの参考になりますでしょうか。

ご報告をお待ちしております。

鳥栖

「・・・・・・・・」

体中の血液の流れが勢いを増している。

全身の皮膚に鳥肌が立っているのがわかる。

「まさか……、まさか……。ありえない……。」

気付くとうわ言の様にそんな事を言っている。ドラマでこんなシーンを見た事がある。あまりに芝居がかっていて（そんな・・）思っていた。

でも今の俺は確かにそう言っている。PCから後ずさりまでしている……。

俺は薄々分かっていたはずだ……。認めるのが怖くて自分に（違う。）と思い込ませようとしていただけだ……。

鳥栖弘氏が送ってきた鳥栖力也の写真……。13歳の頃の鳥栖力也の写真は、2001年のzeroの教祖とは似ても似つかぬものであった。

俺は知っている。

もう、自分を誤魔化せない……。。

1998年に死んだ鳥栖一弥は、2001年には愛知県の田舎町で新興宗教の教祖として存在していた。

ありえない事が起こっている・・・。

死者の再生。

再度 zero の教祖という男の写真を立ち上げる。

P Cの中から俺をまっすぐ見ている・・・。

かつて「神の子」と呼ばれた青年・・・

（キリストは再誕する）

「君は・・・」

背筋を何かが這い上がっていくのがわかる。

熱帯夜

「本物の・・・神・・・なのか・・・？」

窓の外は湿気を含んだどろりとした闇に包まれていた。

その闇は俺の言葉を吸い込んでいく・・・。

第3章1話：展開

携帯が鳴った。

P M 8 : 0 0 新宿駅南口近くの立ち食い蕎麦屋にいた大賀龍雄は喉に流し込んでいたそばでむせてしまった。

「・・・はい。大賀です。」

胸の辺りを、拳で2・3回叩きながら携帯を取った。

「おお、大賀か。今、どこだ？」

捜査一課の係長石打巖からであった。

「新宿です。」

のどに詰まった蕎麦を水で流し込みながら答える。

「今、新宿署から連絡が入った。お前が一番近くにいるんじゃないかと思ってな。現場はワシントンホテル新館の11階。コロシだ。すぐに向かってくれ。マル害は肝臓を取られてる。」

「!!!!!!!!!!!!」

飲み込んだ蕎麦を吐き出しそうになるのを堪えて、大賀は店を飛び出した。

（8人目か!!!まだ2週間だぞ・・・!!!）

前回のコロシから2週間しか経っていなかった。どんどんペースが上がっている。

新宿駅に向かう人波とは反対方向の、現場のワシントンホテルに向かって大賀は走った。

パトカーがサイレンを鳴らしながら猛スピードで甲州街道を走っている。

道行く人は何事かと振り返ってパトカーの方を見るが、すぐに何事もなかったかのように歩を進めている。

新宿駅周辺は一瞬だけ騒然となった。

新宿ワシントンホテルのその部屋は柔らかな間接照明が使われ薄い

ベージュ色で全体が統一されていた。ベットには細かな花柄の薄いピンクのカバーが使用され真っ白なシーツは清潔感が溢れている。旅人が疲れを癒すには絶好の空間であった。

しかしながらその床全体は水でびっしょりと濡れ、歩きたびに（ぴちぴち）と音がする。部屋の外の廊下にまで水が溢れ出ていた。

被害者は部屋の浴槽の中で発見された。被害者の体が栓代わりとなつて排水溝に流れるお湯を堰き止め、やがては浴槽を溢れ出し、部屋に染み出し、ドアの下のわずかな隙間から廊下にまでお湯が溢れ出した。

同じフロアの宿泊客からの通報で従業員が駆けつけた。ブザーを鳴らしても返事がない為、マスターキーで部屋を空けた所で浴槽の中に沈んでいる被害者を発見した、という次第であった。

被害者はこの部屋の宿泊客である中年女性でほぼ間違いないと思われた。フロントの宿泊記録によれば夫と思われる中年男性も同宿しているはずであるが、遺体発見時には姿がなかった。

大賀が現場に到着した時には遺体は既に近くの大病院に運ばれていた。所轄の刑事の報告によれば、被害者の腹部は刃物のようなもので切り裂かれ、その一部が摘出されたような痕跡が確認できたらしい。

（マル害の状況はかなり近い）

「だが・・・これは・・・」

大賀はひとりごちりながら部屋の中を見渡す。

清潔感を保ったままの部屋

被害者は中年女性

人目につきやすいシティホテル

過去7件の殺人とは、腹部を切り裂かれ内臓の一部が摘出されると
いう殺害方法を除いては、何一つ一致していない。

（過去7件の事件を真似た模倣犯か・・・？あるいは・・・？）

既然大賀の頭の中では、今回の殺人は過去7件と別物であるとの仮
説が出来上がりつつあった。

「大賀さん」

所轄の若い刑事から背中越しに声を掛けられた。

「マル害の旦那が見つかりました。既に殺害を自供している様です。
今、新宿署に移送中との事です・・・」

「・・・そうか・・・」

大賀はその刑事の方を振り向きながら答えた。

（やはり今回は別物だ・・・。）

新宿署に向かおうと背を向けた大賀にさらに声をひそめて続けた。

「それと・・・腹を切り裂いた後に、肝臓を食ったと自供しているようです・・・」

（なに！！！）

大賀は目を大きく見開きながら振り返る。

「食ってる事は知らないはずだ・・・」

一連の殺人事件の中で、部屋が血塗られ、被害者が内臓を切り開かれている事は、稀に見る猟奇事件として頻繁に報道され広く知られている事であった。

しかしながら、そこから先……。肝臓が取り出され食われている事は、直接捜査に関わった者以外は知る事のできない事項であった。

殺した人間の肝臓を食う、などという殺人犯がそうそう何人もいるものではない。

大賀は部屋を飛び出した。

「ああ、大賀さん。第2の方です」

新宿署に着くと以前捜査本部でコンビを組んだ新宿署の刑事大木達也が声を掛けた。

第2とは第2取調室の事である。部屋にマジックミラーが取り付けられ取調の様子を見ることができる。

大賀が第2取調室の隣の部屋に入る。容疑者である被害者の夫が取調べを受けているのがマジックミラー越しに見える。

取調べ室真中に卓上ライトが置かれたスチール製の机が置かれ、それを挟んで大賀の向かい側に容疑者、背中を向けて担当刑事が座っている。向かって右側に取調室の入り口があり、その脇に置かれた小さな机で書記担当の若い刑事が調書を開いて内容を筆記している。

「阿世知美津夫 58歳。マル害は妻の陽子 56歳だそうです。東京へは観光旅行で来たと言っています。犯行後、甲州街道沿いを府中方面にふらふら歩いてる所で職質に掛かったそうです。」

取調べの様子を見ている大賀の後ろから大木達也が言う。

色黒で痩せた体を白いワイシャツに包み身長は160cmくらい、小柄だ。オールバックの黒々とした髪と大きく横に広がった鼻。厚

い唇と濃く太い眉毛に眼窩の窪んだ大きな目。顔の一つ一つのパーツは大きく、印象が強い。取調べの刑事の質問をややうつむきながら聞いている。

「それで？食ったと言ってるそうだが」

「ええ。肝臓を食ったと・・・」

大木は大賀の隣に立ってマジックミラーを眺めながら言う。

「マル害は心臓発作か何かで死んだと言っています。それで食った、と。」

「心臓発作・・・？死後に食ったと言ってるのか？」

「まもなく検視結果が出てくると思いますが・・・」

（これも違う・・・）

過去7人の場合は生きたままの状態で肝臓を取られている。ここにも相違点が存在した。

「・・・そもそも、何で食ったんだ？理由は？？」

「それが・・・。まだよく分かりません。その所になると奴さんやつ急にわけの分からない事を言い出すんですよ。その・・・クロがどうか・・・」

「・・・・・・」

大賀はしばらく考え込んだ後

「ちょっと、ヤツと話したいんだが・・・」

そう言つてマジックミラーの方へあごを向けた。

「わかりました」

そう言つて大木は部屋を出ると、取調室に入ってきた。取調べをしている刑事に近づき耳打ちをしている。

大木とその刑事は、しばらくのやり取りの後やがて立ち上がって取調べ室から出て行つてしまった。

この時、大賀はそれまで後姿しか見ていなかった取調べ担当の刑事の顔を確認できた。背はさほど大きくないが、髪も多く、がっちりした体型であつたので大賀と同年代くらいかと思つていたが、年の頃で50代半ば、大岩と同じくらいのベテラン刑事であつた。

取調室の中は書記担当の若い刑事と容疑者である阿世知の二人だけ

になった。

阿世知美津夫はそんな状況になっても取調べを受けていた時と全く変わらず、やや俯^{うつむ}きぎみの姿勢のまま、まるで凍^{こも}ってしまったように身じろぎもしない。

やがて、大木が大賀の待つ部屋に戻ってきた。

大木曰く、取調担当の刑事が、容疑者に会わせる事を拒否しているらしい。

よくある事だ。

所轄にはこういうタイプの刑事がよくいる。警視庁捜査1課と聞いて必要以上にライバル心を燃やして、何かと難癖^{なんへき}つけたり、絡^{から}んでくるタイプだ。

大賀はそれはそれで仕方がないと思っていた。確かに所轄との合同捜査時での本庁の優遇^{うゑう}ぶりは時に度を過ぎていた。

「わかった。それなら、取調べが済むまで待たせてもらっ。調書を見せてくれ。それくらいなら了承願えるかい？」

「もちろんです。申し訳ありません、本当に言い出したら挺てこでも動かない方ですて・・山倉さんは・・。」

大木は心底申し訳なさそうな顔を大賀に見せる。あの刑事は山倉と言うらしい。

やがて、山倉が部屋に戻ってきた。椅子を引きながらマジックミラーの向こう側で見ているだろう大賀の方をちらと見る。

しばらくは、今まで同じように、刑事の話をうつむいたまま聞く容疑者という絵が展開されていたが、急に阿世知が目を剥いて山倉の方を見た。

大賀が取り調べの様子を見始めてから初めての反応であった。

すぐさま山倉が机を勢いよく叩く。

すると、今まで抑えていた感情が爆発したのだろう、阿世知は椅子から立ち上がり、顔を紅潮させて何かを叫びはじめた。

書記担当の若い刑事が思わず立ちあがるのを山倉が手で制す。座ったまま阿世知を見上げている。

しばらく叫び続けていたが、やがて崩れる様に椅子に腰掛けた。

すべてを吐き出したのか、阿世知は焦点の定まらぬ目をしてかろうじて椅子に引つかかるように座っていた。こうなってしまったら後は時間の問題だ。

大賀は椅子に座りタバコに火を点けた。煙をゆっくり吐き出しながら阿世知の表情を眺めていた。

（落ちたな……。やるじゃないか。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7517f/>

神の子

2010年10月9日13時23分発行